# 日本再発見

駐日ジョージア大使
ティムラズ・レジャバ

日本にはこんなに多くの
美点が眠っているのに、
他ならぬ日本人が
その価値を見過ごしている！

日本一のインフルエンサー大使が語る
「日出ずる国」日本の美しき伝統

# 日本再発見

ティムラズ・レジャバ

星海社

291

SEIKAISHA SHINSHO

## はじめに

駐日（ちゅうにち）ジョージア大使のティムラズ・レジャバと申します。

「日出（ひい）ずる国」――私の祖国ジョージアでは、日本のことをこう呼びます。日本への憧（あこが）れと敬意を、太陽の昇る方角に重ね合わせた表現です。

日本とジョージアは飛行機で15時間から17時間くらいの距離で、決して近いとは言えません。しかし、一見すると遠い国のように思えるジョージアと日本の精神性には、深いところで共通点があります。

たとえば、日本に茶道の文化があるように、ジョージアでは国のシンボルであるワインを飲むときに、「スプラ」という深い精神性を持った伝統的な儀式を行います。私は茶道を学びながらスプラのことを思い出し、日本とジョージアの文化が似ている不思議に感銘を受けます。

ジョージアの国土は北海道ほどの大きさながら、山があり海もあり、熱帯以外のすべて

の気候帯がありと自然に恵まれ、またヨーロッパとアジアが交わる文明の十字路として古くからの歴史と伝統を持っています。シュクメルリやカスピ海ヨーグルト、そしてジョージアワインなどジョージアの食文化は今や日本でも受け入れられていますが、それは自然や歴史を大事にする国民性が同じだからかもしれません。

私はそんな、日本から見て「遠くて近い国」であるジョージアに生まれ、幼少時に日本に渡って人生の半分以上を日本で過ごしてきました。これまで両国の間を何度往復してきたことか、もはや数え切れないほどです。

本書では、私が日本を深く知るジョージア人として見聞きし、体験してきた日本のすばらしい文化や興味深い伝統、外国人の目からすると奇妙に思える習慣など、日本人のみなさんが知らないさまざまな日本について語っていきたいと思います。

私は１９８８年、生物工学者アレクサンドレ・レジャバの長男としてジョージアの首都トビリシに生まれました。ジョージアは１９９１年に旧ソ連から独立し、ソ連崩壊後の92年に日本はジョージアの独立を認めています。まさにその１９９２年、私の父は広島大学大学院にて博士号を取るべく留学を決め、一足先に日本に渡った父の後を追って母とまだ

4歳だった私も来日しました。

私の祖父も遺伝学の研究者です。1978年に旧ソ連で開催された国際学会で、祖父が医者で研究者の角谷哲司（かどたにてつじ）先生と知り合い、角谷先生が産婦人科医院を営んでいた広島に父が留学できないかと祖父が相談したことで、私たち一家は日本に引っ越してきたのです。

ですからレジャバ家は三代にわたって、いえ、私が駐日大使として生活する中で生まれ育った私の子供たちも入れれば四代にわたって、日本と深いご縁で結ばれていると言えます。

4歳から8歳までは広島、その後、アメリカやカナダで少し生活しましたが、父がつくば市の理化学研究所で遺伝子解析の仕事に就くことになり、小学校5年生のときに再び日本に戻ってきました。そこから小中高大と、日本の学校で過ごしました（高校時代に1年間、祖国ジョージアに留学しています）。そして早稲田（わせだ）大学を卒業後、新卒でキッコーマンに入社して3年間働き、その後、ジョージアで起業しましたが、縁あって駐日ジョージア大使となり、2019年から再び日本で暮らしています。

日本は私にとって、かけがえのない第二の故郷です。

私は外国人でありながらも、日本のみなさんと同じような教育を受け、その時代の日本ならではの経験をしてきました。

日本の小学校に通い、放課後には友人の家で『パワプロ』（TVゲーム『実況パワフルプロ野球』）をやったり、「プロ野球チップス」のカードを集めて友人たちと交換したり、あるいは学校でバトエン（「バトル鉛筆」）に熱中したり、はたまた遊戯王カードを持ち込んで先生に怒られたりした経験もあります。小学校の授業は午後4時には終わりますが、私の両親は共働きで6時までは家に帰ってきませんでした。ですから放課後には野球、ドッジボール、キックベースをしたり、児童館や公民館で本を読んだり、「ひがのや」という大好きな駄菓子屋さんにみんなで行ったりしました。思い返すと、どの遊びにも日本ならではの工夫があったと感じます。

一例を挙げると、日本の駄菓子には「当たり」があります。当たると同じお菓子がもうひとつもらえたり、好きな駄菓子と交換できる商品券がもらえたりしますよね。子供のころ、100円が当たると最高の気分でした。しかし実は、このような子供を楽しませるしかけは、私が知る限りジョージアや北米では見かけることがない、日本独自の文化なのです。

遊びだけではありません。教育に目を向けても、給食をみんなで食べたり、掃除をした

りという時間や習慣は、ジョージアの学校のカリキュラムには存在しません。私も小中高時代には学校の廊下を掃除しましたが、体育館の掃除の際にこっそりバスケをやったり、武道館の掃除の際にはそこに並んだ卓球台の誘惑に負け、ついつい友だちと勝負したりしました。もちろんバレて桜井先生に怒られたわけですが、今となってはそれもいい思い出です。そういったことまで含めて日本の日常の風景であり、文化のひとつだと思っています。

早稲田大学に通っていた学生時代には、東京都文京区の目白台にある和敬塾という学生寮に住んでいました。ここには在学中の村上春樹も住んでいたそうです。学生寮自体はどの国にもあり、珍しいものではありません。しかし、日本の寮では何よりも「集団ありき」の行動を求められるところが、おそらく他国の寮とは異なります。私は和敬塾で日本らしい集団のメンタリティの良さを学びました。

新卒で就職したキッコーマンは、日本企業の中でも特に日本的な会社だと言っていいと思います。幼少期から日本に住んできた私でも、日本らしい企業特有の慣習や集団の力学には、驚くことがたくさんありました。

また、先ほども少し触れました通り、私には5歳と3歳と1歳の娘がおり、妻子も日本で生活しています。上のふたりの子供たちはバッグを背負って、自ら近所の保育園に登園

します。これをジョージア人に話すと、その自立的な様子に驚かれます。「そんな小さな子供が、よく自分で行けるね」と。

ジョージアは世界の中でももっとも治安が良い国のひとつであり、子供がひとりで町中をフラフラ歩いていても犯罪に巻き込まれる危険性は低いのですが、それでも親が世話をして、子供を送り迎えするのが当たり前なのです。こうした細かい点のひとつひとつに、日本らしさが感じられるのです。

断っておきますと、私は日本の文化や歴史の研究者ではありません。ですが、私には、今述べてきたように、ほかの国の駐日大使や日本通、知日派の外国人でもなかなか経験していないようなことを経験してきたという自負があります。大学やシンクタンクなどで勉強・研究しただけではわからない日本の一面も、自分なりの経験を通じて深く理解してきたつもりです。そしてそれは今の駐日大使の仕事にも活かされています。

私は日本とジョージアの両方の良さを経験し、間に立つ存在として、適切な距離感でそれぞれを客観的に評価できるのではないかと自任しています。学術的な蓄積（ちくせき）に基づいた専門的な見方ではありませんが、自分が関わってきた日本の文化、社会、人々について、こ

の本では論じたつもりです。

外側から見た日本の姿を知りたい日本の方には「ああ、あれは日本独特のものだったのか」と改めて発見していただきたいですし、日本に関心のある日本人以外の読者の方には、日本文化の本当の入門書のひとつとして、観光しただけではなかなかわからない日本の旨味、良さをお伝えしていきたいと考えています。

目次

はじめに 3

第一章 日本の伝統文化 17

日本を理解することは外交官としてのミッション 18
日本文化のもっとも洗練された形が皇室行事 25
お祭りは日本人の本気 38
むやみに情報を与えない茶道のわびさび 44
『徒然草』に感じる実用の精神 47
『こころ』で知る日本人の心理 48
相撲の伝統と儚さ 51
本書執筆の動機 58

第二章 子供時代の原体験 61
駄菓子屋は学びの場 62
おもちゃに感じる日本らしさ 66
放課後の思い出 71
毎週更新で人生の一部になるアニメやマンガ 74
外国にはない「部活」という文化 77
第三章 大学時代の思い出と早稲田散策 85
胸突坂周辺は日本らしさの密集地 87
和敬塾で体感した寮文化 91
三笠屋文具店と文房具の魅力 95

学生街・早稲田のラーメン屋 97
今はなき銭湯とたいやき屋 102
学生時代のアルバイトが教えてくれたこと 104
早稲田の良さとは何か 108

第四章 日本人の働き方 111

就職活動のつらさ 112
老舗企業キッコーマンで経験したこと 118
「普通の人」のレベルが普通ではない国・日本 129
なぜ日本の接待文化は発達したのか 135
歓送迎会は一期一会の精神の表れ 141

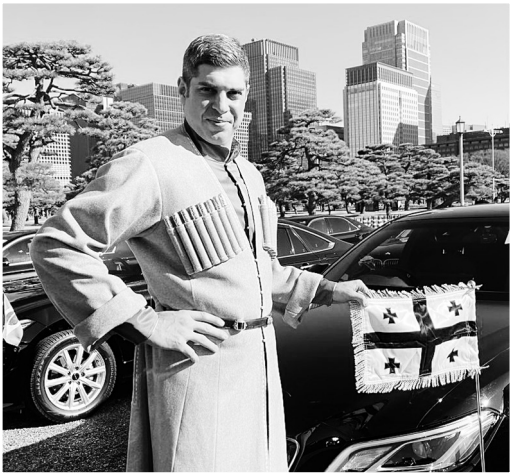
第五章 日本のすごい食文化 147
和食の本質は「素材の微妙な差異を味わうこと」 148
食品売り場は買い物をイベント化する 152
ラーメン屋は店ごとの世界観を楽しむもの 155
東京・高円寺 ラーメン健太 159
京都 新福菜館 163
弟・ニコロスが語るジョージアでのラーメン作り 168
お弁当は各家庭の味を詰め込んだ小宇宙 172
アナ夫人のお弁当作り 176

第六章 茨城散策と地元の歴史の再発見 187
謙虚だけど実はすごい茨城県 188
アヴィと巡るつくば・土浦の史跡 192
上高津貝塚で歴史の積み重ねを感じる 195
大杉神社で宗教の歴史に触れる 201
般若寺で河童のミイラと出会う 204
日輪寺で宗派の多様性を知る 208
大鷲神社と故郷・手代木 212
身近な場所にも日本らしさ、歴史や文化が眠っている 215
伝統に気軽に出会い、地元を大切にできる社会を 216

第七章 日本社会の背後にあるもの 223
「細部」に目がいく 224
ルールの島国・日本——電車の優先席問題から 227
日本が変わるためにやるべきこと 235
日本とジョージアに共通する死生観「人生は儚い」 237
あとがき 246

第一章

# 日本の伝統文化



## 日本を理解することは外交官としてのミッション

世界にはいろいろな国があり、いろいろな人種がいます。日本には自分たちの言語、文字、文化、伝統、文学、芸術もあればアニメ、マンガのような「日本といえば」と言われてすぐに思いつく特有のポップカルチャーまであります。「これぞ日本」「日本人」と言えるもの、説明できる要素がたくさんあります。日本人はこのことを幸せに思うべきだと思います。

国によっては、「自分は〇〇人だ」と言っても隣り合う国と同じ言語、文化、民族であることもままありますし、そのせいでナショナル・アイデンティティのゆらぎが生じたり、むりやり隣国との違いを求めることになって軋轢（あつれき）や差別が生まれたりします。あるいはひとつの国の中に異なる文化や宗教、人種同士を有する人たちを包摂するために莫大な労力をかけなければいけないケースもあります。

そんな中で、国民がおおよそ共通した言語を話し、年間行事や祝日の大半を共有し、さらに「日本の文化といえばこれ」「日本の食といえばこれ」といった「日本っぽいもの」のイメージが諸外国に広く流通している。これは日本の大きな財産です。

ジョージアにも土の中に埋めたクヴェヴリという器で発酵（はっこう）させて製造するジョージアワ

インをはじめ、ジョージアらしい独自の文化がたくさんあります。しかし、ジョージアの場合は国が小さく、世界からすれば、ジョージアのことをよく知っている方が珍しいのも事実です。だから外国の方と話すときは「ジョージア人？　ジョージアってどこにある国？何語を話すの？　どういう文化があるの？　ふだん何食べてるの？」といった素直な質問から入ることの方が多いかもしれません。むしろ、初対面の外国の方に「ヒンカリとハチャプリが大好きなんだ」「ワインの発祥の地だよね」「ジョージアの民族合唱すごいよね」などとコメントをいただくと「よくご存じですね」と珍しく思います。

けれども日本なら「ああ、日本人ね。アニメ！　スシ！　ゲイシャ！」みたいなステレオタイプは、最低限国際的な認知を得ています。そのくらい著名な文化があるわけです。これ自体が、全世界に２００近い数ある国の中では稀有な部類だと言えるのです。

私は日本在住期間が長いですが、日本文化に関してより注目するようになったのは外交官の仕事に就いてからです。ジョージアから要人が来た際に、滞在時間が限られているなかで楽しんでいただき、日本に対して最大の良い印象を持って帰路についてもらうことが、私の外交官としてのミッションだからです。

もちろん、私と結婚するまではジョージアでずっと暮らしてきた妻や、日本で生まれ育った子供たちに楽しんでもらい、日本を知ってもらいたいという思いもあります。

ジョージアの要人に短い滞在時間で日本を最大限に味わっていただくためには、私自身がさまざまな知識、そして見どころを知っておかなければいけません。

私のおもてなし次第で、要人からの私への評価が決まるだけでなく、日本という国に対しての印象も変わります。日本に対して良い印象を持つ要職のジョージア人が増えれば、日本人のほうも「ジョージアの人たちは日本を大事に思ってくれている」と感じてくれるでしょう。それは今後の日本とジョージアの関係発展につながります。

私がX（旧ツイッター）でよくフォロワーのみなさんに「〇〇県の見どころやおすすめの食べものを教えてください」とおたずねしているのは、フォロワーの方々と交流したいという気持ちもありますが、切実にその情報を求めているからでもあります。

ただ、そうやって日本各地の魅力的な場所や行事、食べものの知見を日々深めているにもかかわらず、残念なことにジョージアから政治家や官僚、企業家、スポーツ選手などが来日する期間はたいてい1日か2日なのです。私はそのなかで相手とすばやく関係を築き、どこにお連れして、何を見てもらえばいいかを常に考えています。たとえば「この日はち

ょうど〇〇区で花火大会がやっている。用事が終わる予定はどこどこで〇時だから、それから移動すれば十分間に合う」といったように。

ここで、大使として要人対応をするときの、私なりのコツや心がけていることをご紹介しましょう。

私の場合、ジョージア政府の上層部とはだいたい直接やりとりができる関係にあります。しかし、数ヶ月先の訪問の細かい旅程まではやりとりができないのが常であり、日程がいよいよ近づいてから一気に詳細を詰めることになります。いざ来日した際には、大統領や大臣クラスは、スケジュールがすべてスムーズであるようにしっかりと管理する部門があり、まず出席が必須の予定を滞りなく進行できるよう手配します。それを除いた、日本を案内できる時間は限られています。

私が要人のスケジュールを設計する上で意識していることは、遂行可能なスケジュールの１２０％以上の過密な案を提案することです。すると、相手はその中でいろいろと吟味した上でフィードバックしてきます。こちらが提案したもののいくつかは必ず却下されるのです。でもそれは想定済みです。むしろ、その取捨選択を見ることで相手の考えや方針が確認できるのです。

ジョージアから遠く離れた日本に来るとなると、個人的に滞在期間中にしてみたいこと、手に入れたいものなどに対するこだわりを持っているケースもあります。過去には盆栽、秋田犬のような日本らしい犬、禅ローズという日本独自のバラの花、特定の薬、工具、ウォシュレット、そしてなんと日本刀などを求められたことがあります。植毛やちょっとした手術の依頼を受けたこともあります。いただく希望は実に多種多様です。外交官って、結構骨の折れる仕事なのだと少しはわかりましたでしょうか？（笑）

このように相手とキャッチボールをしながら、スケジュール案を組み替えたり削ったり新しい予定を入れたりして、最終的なスケジュールを固めます。この時点でも「詰めすぎ」くらいの方が融通がききます。「あれもこれもやりたかったが、時間の都合でこれはパスした」という場合、「次にまた来たときに行ってみたい」という期待を持って日本を発つことになりますが、スケジュールを少なめにしていたことによって、せっかくの滞在中にヒマな時間ができてしまったら愚の骨頂で、「日本はアクティビティに乏しい国」「やることがなくて退屈だった」という印象を与えてしまいます。

日本のいいところは、現地・現場の対応が非常に丁寧で細やかなことです。外国から来ているお客様であるとわかると特に心を添えて対応してくださることが多く、ジョージア

からの要人もそれに満足して帰ります。読者の中には海外旅行の経験のある方もいらっしゃると思いますが、トラブルが起こって当たり前、声を荒げて交渉しないと満足するクオリティのサービスが得られない、といった国も残念ながらありますよね。でも日本にはおもてなしの文化があるので、あらゆる意味で信頼感があり、スケジュールを組むこちらとしても安心できます。

東京では、要人を明治神宮や豊洲（とよす）市場によくお連れします。ジョージア人も日本人同様に歴史が好きですし、日本は長いあいだ鎖国（さこく）をした国、自分たちの文化をずっと継承してきた国というイメージがあり、歴史や伝統に関心が高いのです。

それから日本には世界最大の魚市場がある魚の国というイメージもありますから、豊洲のことはみんな知っています。大統領や大臣もお連れしましたが、喜んでいただけました。ジョージアも一昔前よりは食の多様化が進んでいて、生の魚も食べられる人が増えています。最近ではみんなお寿司も食べます。

豊洲には卸売のお店もあって、そこでもともと築地にあった老舗（しにせ）の包丁店で包丁を買って首相にプレゼントしたこともあります。日本には刀のイメージもありますからね。

先ほど述べた通り、要人が来ると刀や盆栽、犬を買っていくことがしばしばあります。

どれも急に入手するのが難しいだけでなく、法律上の特別な許可や国外への輸送に関する知識やコネクションが必要ですから、あれこれ手を尽くして手配する経験をたくさんしてきました。

いつも心残りなのは、スケジュールの都合上、東京以外の土地を案内するのが難しいことです。本当であればお祭りや花火大会、お茶会、地方の名所や史跡も見てほしいのですが、それはなかなか叶いません。

関東近郊ではたとえば鎌倉は伝統的なお店もお寺も見られて雰囲気がよく、おしゃれな場所です。私も大好きな餡子(あんこ)のお店があって、製餡所で買ってはトーストに塗ったり、そのまま食べたりしています。

ほかにもたとえば和歌山の高野山(こうやさん)の奥之院(おくのいん)には全国の戦国大名など歴史的な人物のお墓があり、また、企業が亡くなった従業員や退職者を供養するために作った「企業墓」は各社の代表的な製品をかたどっていて、ロケットやコーヒーカップ、ヤクルトの形をしていて非常にユニークです。

日本は島も魅力的です。私は自動車免許の合宿で伊豆大島に行きましたが、そこで初めてくさやを買って食べました。トースターに入れてあたためると、想像をはるかに超える

強烈なにおいがしました。要人におすすめするかといえば悩ましいところですが、一生忘れられない体験になることは間違いありません。

佐渡島（さどがしま）にも大学のプログラムで行きましたが、なぜあんなにすばらしいところがリゾート開発されていないのか、不思議に思いました。ジョージア人にとって、海といえば遊びの場所です。しかし日本では島や海沿いの町は商業の拠点というイメージが強いのでしょう。

このように、外国人に広く知ってもらいたい日本の魅力的な場所はたくさんあります。日本人が気づいていないものでも、もっとアピールしたり投資をしたりすれば観光資源になる、隠れた日本のいいところもたくさんあると感じます。

ジョージアからの要人はもちろん、日本で生活されているみなさんにも、日本各地を堪能してほしいと思います。もちろん私自身も全国に足を運び、日本の新たな面をこれからも知っていくことでしょう。

## 日本文化のもっとも洗練された形が皇室行事

私は外交官としてさまざまな皇室行事に参加させていただいております。なかには日本

の方でもなかなか経験することのない、貴重な機会も少なくありません。皇室について、大使として見聞したことのいくつかをお話ししようと思います。

最初に私が皇居に足を踏み入れたのは、平成から令和へと元号が変わり、皇位継承が行われた即位礼正殿（そくいれいせいでん）の儀に、ジョージアのサロメ・ズラビシュヴィリ大統領とともに参加したときでした。

各国の首脳や外交団も顔をそろえていましたが、私たちはジョージアの伝統衣装であるチョハを着て参りました。そのときの様子がネットで話題になり、「『ナウシカ』みたい」「『スター・ウォーズ』みたい」とジョージアが一躍有名になりました。緊張しながら参列した儀式で、まさか民族衣装がここまで注目されるとは夢にも思っていませんでしたが、以来、皇居は私にとって思い出深い場所になりました。

皇居の中は日本人であってもなかなか入る機会はなく、当然ながら自由に撮影することは許可されていませんが、どんな場所なのか、どんなふうに儀礼が行われるのか、言葉でできるだけ表現してみたいと思います。

皇居前の広場は広く、何か行事がある際には、外交官などが乗る黒塗りの車でいっぱいになります。車はゆっくりと二重橋を渡って皇居の敷地内に入っていきます。私が即位礼

以来いつも感じているのは、秒単位で計算された段取りのすばらしさです。皇室行事のとき、宮内庁の人たちはもちろん、皇室のおひとりおひとりがさまざまな点に配慮され、皇居を訪れる相手のことを思いやり、時間を守って円滑に進むように工夫をされておられることを感じます。

皇居の中では、どの立場の人がどの段まで上がれるか、どのお客さんをどの部屋に連れていくのか、どのフロアでお出迎えするのかといった序列が、床の色、つまり木か竹かといった材質によって示されています。また、建物の中に一切飾りやインテリアがないため、実際の空間以上の広さを感じさせます。もちろん、控(ひか)え室には椅子や机くらいはありますが、それだけです。ガラス張りになっており、室内のものよりも外のお庭を見て自然を楽しんでもらおうという狙いがうかがえました。余計なものが室内になく、建物と自然とが融合しているようにも思えます。何もないからこそ自然に目が向き、また、何もないからこそ自分自身の存在について考えさせられる空間でした。

「何もない」とか「自然」と言っても、ほったらかしという意味ではありません。庭は非常によく手入れされ、季節感を感じられるようなものに絞って、来場者に提示されています。

茶道でもそうですが、日本の表現方法は「この花は、こういうものです」とシンプルに示して終わりです。これは、日本人にとっては当たり前のことかもしれませんが、外国人にとっては奇異に映ります。なぜなら、我々はせっかく準備をしたからには詳しく説明したくなってしまうからです。

茶道では、茶会を開いた方が「この器はこうです」「掛け軸には、こう書いてあります」「この季節だから、これを用意しました」とだけ淡々と伝え、あとは相手にありのままを感じてもらいます。他方、外国であれば「この模様の由来は〇〇年、××に始まり、私自身もすごく好きなもので、祖父との思い出を想起させるものであり、夏を感じさせる……」云々と長々語ることでしょう。ところが日本では、皇居の担当者がお庭を見て「このお花が咲いています」とそっとひとこと説明するだけです。でも何もないからこそ、その一言が印象に残り、こちらでもっと知りたい、調べてみたいという能動性を喚起するのです。私はこのような、物事を少し控えめに紹介する日本のスタイルを「腹八分目」にちなんで「情報八分目」と呼んでいます。品があって良い姿勢だと感じます。

皇室は空間設計のみならず、行事の進行においても、緻密な計算と飾らないシンプルさが同居しているのが印象に残ります。日本の天皇家は１２６代、約２７００年にわたって

続く世界最長の王室ですが、長い歴史のなかでもっとも良い部分だけを残して継承しているのでしょう。

即位の際に行われる正殿の儀には歌もなければ踊りもなく、食事も提供されなければスピーチもありません。来賓は儀式が始まるまでただ待機し、式が始まると新たに天皇・皇后に即位されたお二方が出てこられて、美しい衣装を披露します。式自体は、大砲をどんと鳴らし、万歳をして終わりだったように記憶しています。それだけなのです。

翌日、森喜朗元総理がジョージアのズラビシュヴィリ大統領とお話しする機会がありましたが、森さんから「びっくりしたでしょう。大砲の音があったくらいで、ほかには何もない。これが日本式なのです」とお話しいただきました。非常に興味深く、たしかに大砲の音ひとつが強烈な印象を残す演出になっていました。儀式やお祝いというと、華美なほどすごいものであり、長々と盛大にやるものだという思い込みがありましたが、皇室行事はまったく逆で、引き算の美学が貫かれていたのです。

しかし手間を省いているかといえばそういうことではありません。先ほども言った通り、式のオペレーションは秒単位で設計されていましたし、いただいた招待状も手書きでひとりひとりに向けて書かれていました。招待された各国の要人は、コの字型をした大きな会

場に座ることになっており、そこから天皇・皇后両陛下までの距離は相当離れていましたが、皆が両陛下の所作に集中できるような配置になっています。

皇室行事は、細心の注意を払って要素を削ぎ落とし、少しだけ残したものにその場の全員の意識が集中するよう構成されているのです。

ありがたいことに、皇居にはそれ以降も何度もお招きいただいています。

たとえば赤坂御苑において陛下が各界の方をお招きしてお庭を披露する園遊会には、内閣をはじめ国会議員の方や各業界の有名な方、それから私のような大使も参ります。

また、新年に各国の外交団がご挨拶にうかがう新年祝賀の儀には必ず参加し、一礼する機会をいただいています。私は民族衣装を着ていきますが、ときどきテレビでも取り上げられます。日本の正月はいつも晴れるのが不思議です。

実は新年祝賀の儀では、立派なお弁当をお土産としていただきます。巨大な鯛とおせちの詰め合わせです。そのおせちは甘さや味の濃さが際立っていて、日本の食べものにしては珍しいです。これは、おせち料理が元々は何日かかけて食べるもので、その間、腐らず、味が落ちずに持つようにお酢に漬けたり、煮込んだりといった工夫によって長持ちさせて

いた伝統を今でも踏襲しているからではないでしょうか。

おせちに加えて、牛蒡（ごぼう）が入った「花びら餅」もついてきます。私の隣に住んでいるお茶の先生にその花びら餅をお見せしたところ「こういう形のものは非常に珍しいですね」と驚いて、お茶の先生のさらに師匠にあたる方のところにお持ちしたそうです。すると、先生の先生は「これが本当の花びら餅です」とおっしゃっていたと言います。普通の花びら餅は味付けが甘く、牛蒡が餅から飛び出ているのですが、そのルーツとなった皇室のものはお餅が大きく、牛蒡が中に閉じてあって外からは見えず、甘くもありません。

おせちにしても花びら餅にしても最高においしく、いただいたものを家族や近隣の方々といっしょに食べることによって、良い縁起がもたらされるような気持ちがします。皇居にうかがった際にいただくお土産は日本最高峰のものばかりで、たとえば虎屋（とらや）が京都に本社を構えていたころから皇室に納めてきた「菊焼残月（きくやきざんげつ）」というお菓子も絶品です。

菊焼ではない、一般に手に入る残月もありますが、紋が付いて

菊焼残月

いないのです。見た目は味において重要な要素のひとつで、模様ひとつで感じられる味も変わります。菊焼残月は見た目も生地も餡もすべてがすばらしい、語彙力を喪失するほどの絶妙なおいしさです。

菊焼残月を食べたとき、そのおいしさを日本のみなさんに共有したいと思って、私はXに感想を投稿しました。そのレビューをご紹介しましょう。

菊焼残月をもったいないと思いながらも食べてみました。

手に取ったときに第一印象として感じたのは、重厚感だ。もちろん、どら焼き等を手にするとき、重厚感を感じることは割と普通ではないでしょうか。しかし何かそれとは違う、鉛のような金属質の重さを感じた。

口に含んだ瞬間、最初に伝わってきたのは、甘さだ。市販のこのようなお菓子よりも甘さが強いということは、自信を持って言える。以前に何度か皇室のお土産、おせちなどの食べ物をいただいたことがあるが、どれにおいても味が濃い目だと感じた。おそらく余分な保存料を使わずに作るからではないかと考えたことがある。し

かし、とにかく、必ず付け加えておきたいのはそれは決してしつこい甘さではなく、その甘みは味覚に悪い刺激を与えないということだ。かぶり付いた瞬間、自分がこのお菓子に魅了されていることがすぐに確認できる。膨らみのある形から予想していたよりは、生地の部分は薄い。焼き目が鮮明で、麺以外でこのような表現をしていいのか分からないが、コシがある。中の餡の輝きには目が眩む。色も独特で、赤みが強い印象だ。見事な濾し具合で、あまりに濃厚なことから、気泡ひとつも寄せ付けない雰囲気がある。まさに女夫のように、生地と餡の調和が完璧だ。

そして食べながら何度となく「菊焼」ということを意識して、そのデザインの美しさがお菓子の魅力を深めていることを感じてしまう。

あまりにもおいしかった。たくさんの感覚が満たされた。完璧と言っては評価が低すぎる。これは芸術品に他ならない。

また、天皇誕生日にもお声がけをいただいております。天皇誕生日には各国の外交団からささやかながら共同でプレゼントをお贈りしています。タイの伝統細工など、持ち回り

で各国ゆかりのものを選んでいますが、いつかジョージアワインも進呈する機会がいただけたらと思っています。サンマリノの大使がもっとも年長者で、日本への滞在期間ももっとも長いことから、外交団長となって各国の外交官をまとめ、宮内庁と折衝し、誕生日のご挨拶も担当しています。

この天皇誕生日の模様は新聞やテレビなどで報道されますが、実は参加者からは、どこから写真を撮っているのかがほとんどわかりません。撮影されているという意識がないのです。皇居はどこを取っても余分な飾りがなく、シンプルな空間ですから、普通に撮影しようとしたら非常に目立つはずです。ところがカメラマンの姿が見当たりません。ある年、「どこから撮っているのだろう?」と注意しながらあたりを見回すと、気づかれないように遠くからカメラのレンズだけがこちらを向いているのを発見しました。カメラのための隙間が用意されており、そのうしろにカメラマンがいるのです。

近くでバシャバシャと撮られると儀式や参加者同士の会話に集中できませんが、撮影の音も聞こえず、撮影者が極力視界に入らないようになっているという心づかいがこれまた非常に奥ゆかしく、品を感じました。

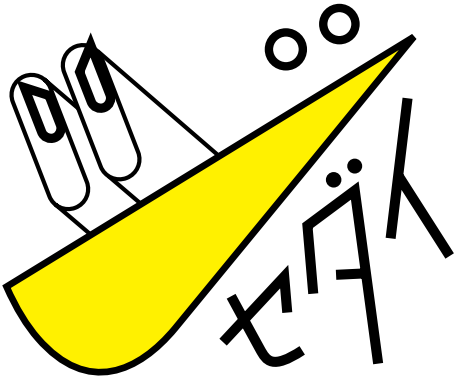
これに近いエピソードがあります。１９９９年にジョージアのエドゥアルド・シェワル

ナゼ大統領が来日した際のことです。シェワルナゼ大統領は旧ソ連時代に１９８５年から１９９０年まで外相を務め、東西ドイツ統一にも貢献したと言われる凄腕の外交官で、日本でも有名だったこともあって大々的にお出迎えされたそうです。

大統領とご一緒していた方から聞いた話なのですが、そのときの皇居での晩餐会中に心地よい音楽が小さな音でずっと鳴っていたんですね。録音したＢＧＭを流しているのかと思いきや、途中で「いや、生演奏で弾いているのだ」と気づき、最後に楽団がご挨拶をするという名目でカーテンが開けられ、演奏の様子を見せてもらったといいます。

何に驚いたかというと、その音楽を奏でていたのはなんと１００人規模の大オーケストラだったのです。これほど手が込んだもてなしをしたならば、大抵の国であればこれでもかと見せつけ、なるべく「大きい」「きれい」「多人数」をアピールしようとするでしょう。ヨーロッパや中国の文化であればそうだと思います。ところが皇居では、奥ゆかしい気構えが至るところに表現されています。

また、２０２１年11月25日に行われた私の駐日特命全権大使就任の信任状捧呈式、つまり正式に大使としての活動が認められるための式でも皇居にうかがいました。




# 何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

**ジセダイイベント**　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

# 行動せよ!!!